

鹿児島県指宿市敷領遺跡における 平安時代の植生推定のためのサンプル採取

酒井 慈

I はじめに

2012年9月11日～12日にかけての2日間、鹿児島県指宿市内の敷領遺跡で平安時代の火山灰層中に含まれる葉化石を調査した。卒業論文では開聞岳の古墳時代（7世紀後半）、平安時代（874年）の火山灰層中に取り込まれた葉化石から当時の植生を具体的に明らかにするというテーマで研究を行った。指宿市敷領遺跡では2012年9月に、開聞岳の平安時代の噴火で埋没した水田域と推定される地点の発掘調査が行われた。敷領遺跡の葉化石のサンプルは前年の2011年の発掘調査地点のものをすでに入手済みであったが、2011年の発掘地点は2012年の発掘調査地点から約1 kmほど西に位置しており住居域と畠域の境の地域であったと推定されている。そこで葉化石のサンプル数を増やすこと、既に入手した採取地点の葉化石との含有状況の違いを明らかにするという目的で調査を行った。

II 方法

発掘調査では平安時代の開聞岳の火山灰層の下に広がる平安時代の地表を調査することになっていたため、発掘調査に先行して行われた火山灰層を剥ぐ作業に参加した。縦約1.5m、横約20mの長方形に掘り込まれたトレンチ内で2 m間隔に15cm四方の調査区を10地点設置し、設定した調査区内において火山灰層の堆積の様子と植物遺体の残存状態を調査した。

III 結果と考察

調査の結果、本地点では前年度の2011年に行われた発掘地点とは異なり、水流などの影響を受けたと考えられる火山灰の二次堆積層が見られた。しかし本地点で葉を含む植物遺体が火山灰中に埋没していることは確認できなかった。本地点で葉化石が見られなかった理由として、当地点が水田地帯に位置すると推定されていることから周囲に葉化石を供給するような樹木などがもともと生育していなかったこと、あるいは発掘調査区域では平安時代のスコリア直下層から湧水があったため、そのような環境下では酸化するなどして地層中に含まれた植物遺体などは分解されてしまい今日まで残らなかったことが考えられた。

IV まとめ

2012年の発掘地点は植物遺体が残っていないという点で前年の2011年の発掘地点とは異なる環境であったことを確認することができた。調査は火山灰層中に思うように植物遺体を見つけることができず難航したが、現地の方々のご協力および本奨学金をいただいたことで心置きなく調査を行うことができた。

さかい・めぐみ (61回生)

文教育学部地理学コース4年生 (2013年3月現在)